



Title	ダグール語南屯方言の特徴
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪外国語大学学報. 1987, 74(1-2), p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81152
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ダグール語南屯方言の特徴

角 道 正 佳

Remarks on the Emüne ayil Dialect of Dagur Language

KAKUDO Masayoshi

In the Emüne ayil dialect of Dagur language spoken in Evenki autonomous region in Inner Mongolia, the first consonant cluster of *bC, gC ~ ɣC is regressively assimilated to the second consonant in some conditions. As a result the consonant cluster of rC in other Dialect in Dagur correspond to geminate consonant in this dialect. *q and *k, unlike other dialect, correspond to x and k respectively, as far as they keep voicelessness.

0. はじめに

筆者は1986年8月12日～13日と9月15日の二回にわたって、当時日本に滞在しておられたマスキ（馬斯克）氏（1941年7月5日現在の内蒙古自治区呼倫貝爾盟鄂温克自治旗南屯に生まれ、1953年1月までこの地に滞在、現在はフフホト（呼和浩特）の内蒙古師範大学で物理の教鞭をとっておられる）の母語を調査した。最初は単にダグール語が少しでも録音できればよいというつもりで、準備も不十分なままで録音を始めた。しかし始めてみると、すぐに、各種の文献で知り得たダグール語の記述とは異なっている点があることに気付き、整理してみると、興味深いことがわかってきた。調査語彙が限られているので、完全に満足できるような法則を取り出すことはできないが、一応満足ができる程度の規則性は得られたと思うので、ここに報告することにした。

マスキ氏に始めてお目にかかったのは、1986年5月24日東京外国語大学で開かれた日本モンゴル学会の懇親会であった。何とかしてダグール語を録音したいものだと思い、お願いすると、快く引き受けてくださった。マスキ氏はハイラル（海拉爾）の生まれで、ダグール語ならもう一人もっとよく話せる人が東京に滞在しているということであったが、その人には、残念ながらお目にかかる機会がなかった。

ダグール語を録音するといっても、文字を持たない言語であるから⁽¹⁾ 書かれたものを読んでもらうというわけにはいかない。そこで、仲素純の『達斡爾語簡志』（以下『簡志』とのみ表す）を利用して、騰克人民公社のダグール語の発音をIPAで表記したもの、漢語訳、対応するモンゴル語（対応する語がない場合は意味的に最も近いモンゴル語）、さらに拿木四来、哈勒額爾敦の

『達斡爾語與蒙古語比較』(以下『比較』とのみ表す)、恩和巴図の『達漢小詞典』のダグール語表記等を記載したカードを作った。

最初の調査は、マスキ氏がたまたま来阪する機会に家に寄っていただいて行った。テープレコーダーの一時停止のボタンをマスキ氏自身に操作していただいて、カードを一枚ずつ提示することによって、ダグール語を確実に思い出すのを待ってから、テープに録音していただいた。録音と同時に、カードにマスキ氏の発音を書き込んでいった。思い出せなかったカードの語は取り除いた。思い出すのに要した時間は、短いものはカードを見た瞬間(カードのどの部分を見ていたかは明らかではないが、あるときは漢語訳、あるときはモンゴル語であったようである。IPAの表記が次第に読めるようになってきたとおっしゃっていたが、時々これは何と書いてあるのかと質問されたことから想像すると、完全には読めるようにはなっていないようである。)から、長いものでは数分(この中には意味を確認していた時間も含まれる。おかげでより適切な意味がわかったものもある⁽²⁾)かかった。

二回目は千葉県船橋市にある日中文教協会寮で行った。中国へ帰国される直前にお邪魔したので、マスキ氏にも急用ができてしまい、非常に望ましくない状況で調査せざるをえなかった。カードは一回目と同じように準備してあったのであるが、時間の制約のため、録音できる状態ではなかったので、録音はとっていない。

ダグール語南屯方言という言い方は必ずしも適切ではないが、従来のハイラル方言の資料⁽³⁾と異なる特徴があるので、あえてこうした次第である。南屯はハイラルから、約10キロ南方に位置している。南屯の発音がすべてこの報告と同じであるということではない⁽⁴⁾。ダグール語南屯方言という言い方でマスキ氏の個人語を表しているという意味に受け取っていただきたい。マスキ氏の発音が従来のダグール語のどの記述とも違っている点があるという意味で、特にダグール語南屯方言と呼ぶことにしたわけである。

1. ダグール語の下位方言について⁽⁵⁾

ダグール語は *p を x として保存しているということ、長母音を保存していること、*aru, *egü に対応する二重母音 au, eu を持っていることなどによってモンゴル語音韻史上、注目を浴びてきた言語(方言)である。しかしダグール語のすべての方言がこれらの特徴を持ちあわせているわけではない。ハイラル方言は *p に対応する x は存在していないし⁽⁶⁾、新疆方言⁽⁷⁾は長母音を他の方言ほどには保存していない。語中の *q, *k はある条件で有声化する方言が多いが、Martin の記述したオノン氏の発音には、この有声化が見られない⁽⁸⁾。マスキ氏の発音では、他の方言に見られる子音の前の r が見られないことがある。例えば、

プトハ方言	ハイラル方言	オノン氏の方言	新疆方言	マスキ氏 (南屯方言)	
1 heki	ê'k'ĩ	heki	Heki	əki	*peki 頭

2	mood	moḡ	moode	Mod	mo:d	*mōdun	木
3	juruwu	ɣ̞ɣ̞p̞ɣ̞r	juruhe	Jurug	dʒurug	*jirūke	心臓
4	larq	la'p'q̃i	larici	Larqi	lattʃ	*nabči	葉
5	kaoqin	xaɣ̞'q̃'ĩɣ̞	kaucin	Kauqin	xautʃiŋ	*qarūčín	古い
6	hejee	k'ẽɣ̞'ẽ	hejee	Heje	kədʒə:	*kejiyē	いつ

1 の例からわかるとおり、*peki の *p はハイラル方言及び南屯方言では保存されていない。2, 6 の例から明らかなように、新疆方言では長母音が保存されていない。3 の *jirūke の例からわかるとおり、オノン氏の方言では母音間の *k の有声化が起こっていない。5 の *qarūčín の例から明らかなように、*q はハイラル方言及び南屯方言では摩擦音が対応する。6 の *kejiyē からわかるように *k はハイラル方言及び南屯方言では閉鎖音が保存されている。マスキ氏の方言はハイラル方言に近いが、4 の *nabči からわかるように、他の方言では r として現れる音が t として現れる（すなわち逆行同化を起こしている）という違いがある。ここに挙げた五つの方言に共通している、いわゆるダゲール語としての特徴は5の例に見られる二重母音だけである。

2. 表記方法

1 で例にあげたブトハ（布持哈）方言と新疆方言の表記は辞書の表記であり、現代中国語（漢語）を表記する拼音字母と類似した音価を持っている表記体系である。子音の音価は q [tʃ], x [ʃ], j [dʒ], y [j] のようになっている。母音字については、ブトハ方言の辞書の体系では [au] を ao で表すが、新疆方言の辞書では au で表してある。さらに詳しくみると、ブトハ方言の辞書では第一音節の o に後続する短母音のうち円唇母音のものは、u でなく o で表してあることが多い。また語末で子音が二つ連続したり、語中で子音が三つ連続するのを許すような音韻解釈に基づいて表記されている。新疆方言の辞書では、子音連続の許容度が少し厳しい⁽⁹⁾

音韻構造の面で Martin の記述はこれとは正反対の立場をとっていて、n 以外の子音は音節末には現れないような体系になっている。実際には Martin (1960:4-5) に述べられているように、どの母音があるかわかりにくい場合にはすべて e という母音が挿入されている。『比較』で採用されている表記には [ŋ] は現れない。その理由は拿木四来、哈勘額爾敦 (1983:14) が述べているように [ŋ] は /n/ の条件異音（語末及び軟口蓋音の前に現れる）であるからである。マスキ氏の発音では、語末に明らかに [n] が聞かれた語（manan「霧」）があったが、[n] と [ŋ] が対立するかどうかについては調べていない。『比較』の表記体系（音素解釈）は語末で子音が二つ続いたり、語中で子音が三つ続いたりするのはごく限られている⁽¹⁰⁾。『比較』では [ɬ], [ɔ] という表記が用いられているが、マスキ氏の発音を表記する際には [u], [o] を用いることにする。

『簡志』に記されている語末の円唇化子音と同じものがマスキ氏の発音にあるかどうかについて

は、結論を保留しなければならない。例えば、kurdw 「輪」はマスキ氏の発音では kurdw にも kurdə にも聞こえるし、obu 「分」は obw にも obu にも聞こえる。これは音素体系全体に関わる問題なので、改めて調査しなければ結論は下せない。しかし、語末の口蓋化子音はマスキ氏の発音では明らかに [i] に聞こえた⁽¹¹⁾

『簡志』では、第二音節以下の短母音には [a], [o] は現れず、[ə], [u] のみが現れる。例えば、ausəm 「粟」、manən 「霧」、olum 「腹帯」、ordog 「以前」のようである。しかし、マスキ氏の発音では ausəm, manan, olum, ordog のように、[a], [o], [ə], [u] がすべて現れた。この問題も音素解釈全体に関わってくるので、改めて調査しないことには結論は下せない。以下に示すマスキ氏の発音は、聞こえたとおりに表したものであって再考の余地を残している。jausəŋ 「行った」と idsəŋ 「食べた」の səŋ に違いがあるかどうか確かめてみたが、違いはなかったし、マスキ氏自身の内省でも同じだった。

二重母音 [au], [eu] は実際には [au:], [eu:] のようであり、とりわけ語末に来る場合には、第二要素が非常に長い。語中に来る場合は注意していないと、第一要素は聞き落とすぐらい短い。これらの二重母音は下降二重母音を思わせるような表記がしてあることがあるが、実際には上昇二重母音ないしは短母音+長母音である。

この報告の焦点は、音声末子音の及び *q ~ *k の発達にあるので、表記方法としては音素解釈を施していない音声表記を用いる。

3. 子音の前もしくは語末の子音で他の方言では r が現れる語

対応するモンゴル文語で音節末に現れうる子音 l, r, m, n, ng, b, d, g, ʀ, s のうち、b, d, g, ʀ, s が音節末（語中で子音の前、あるいは語末）にある場合、従来の記述によると、ダゲール語では r になっている。しかし、南屯方言では、必ずしも r になっていない語がある。

まず、他の方言（ここではプトハ方言の例を示す）で語中で子音の前に r が現れるが、南屯方言では r が現れないで、後続子音と同化している語がある。例えば、⁽¹²⁾

		南屯方言	プトハ方言	モンゴル文語	
		C ₁ C ₁	r C	C ₁ C ₂	
A	1	xattag	kart(r)ag	qabtara	キザミタバコ入れ
	2	xattas	kartas	qabtasun	板
	3	kətt-	kert-	kebte-	横になる
	4	əttʂu:	erquu	ebčigün	胸
	5	lattʂ	larq	nabči	葉
	6	xattʂe:-	karq-	qabči-	締めつける
	7	twattʂ	torq	tobči	ボタン

8	sapp	sarp	(sabqa) ⁽¹³⁾	箸
9	tikkäs	tibkees	(tebegesü) ⁽¹⁴⁾	釘
10	ədd-	erd-	(ebdere-)	壊す
11	ott-	ort-	uɣtu-	迎える
12	batt-	bart-	barta-	含む
13	tott-	tort-	toɣta-	決まる
14	sott-	sort-	sorta-	酔う
15	nošš-	nurx-	nögči-	過ぎる
16	dədd-	derd-	degde-	飛ぶ

他の方言で語中で子音の前に r が現れる語に対して、南屯方言でも r が現れる語もある。

	南屯方言	プトハ方言	モンゴル文語	
	r C	r C	C ₁ C ₂	
B 17	ordʒ	orj	urji	角笛
18	art	art	arta	去勢馬
C 19	xarx-	(harh-)	qadqu-	刺す
20	mo:rka:-	(moorkaa-)	marudqa-	悪くなる
21	ərk-	herk-	esge-	割る
22	əurkə:-	eurkee-	egüske-	始める
23	gərki:-	gerki-	giški-	踏む

他の方言で語末で子音の前に r が現れる語に対して、南屯方言でも r が現れる語もある。

	南屯方言	プトハ方言	モンゴル文語	
	r #	r #	C #	
D 24	bodo:r	bodoor	budur	顔料
25	xodir	kodir	qudur	井戸
26	ugir	(ugir)	ökid	娘たち
27	kəukər	(keuker)	keüked	子供たち
28	olor	olor	ulus	人々
29	buri	buri	bös	布

他の方言で子音の前あるいは語末に r が現れる語に対して、南屯方言で r 以外の子音が対応する

語がある。

		南屯方言 $C_1 C_2 \sim C_1 \#$	プトハ方言 $r C \sim r \#$	モンゴル文語 $C_1 C_2 \sim C_1 \#$	
E	30	dabt-	dabt- ~ dart-	dabta-	鉄を鍛える
	31	dobtol-	dortol-	dobtala-	突き進む
	32	dogšij	dorxin	doršin	乱暴な
	33	bugs	burs	bögse	(獣の)後半身
	34	džug	jur	jüg	方向
	35	gəskə:-	(gerke-)	geske-	溶かす

他の方言でも南屯方言でも共に r 以外の子音が現れる語がある。

		南屯方言 $C_1 C_2 \sim C_1 \#$	プトハ方言 $C_1 C_2 \sim C_1 \#$	モンゴル文語 $C_1 C_2 \sim C_1 \#$	
F	36	džabk	jabk	(jabsar)	衣服の結び
	37	džebdž	(jabj)	jabji	口の縁
	38	kərag	(kereg)	kereg	用事
	39	məgdž	(megj)	megji	雌の猪
	40	noktš	nokq		背髄

以上の例をモンゴル文語の子音連続の面から整理してみると次のようになる。

例の番号	モンゴル文語 の子音連続	南屯方言 の子音連続	プトハ方言 の子音連続
A 1 ~ 10	b C	同化	r C
11 ~ 16	ɣ C ~ g C	同化	r C
B 17 ~ 18	ɣ C ~ g C	r C	r C
C 19 ~ 20	d C	r C	r C
21 ~ 23	s C	r C	r C
D 24 ~ 25	ɣ # ~ g #	r #	r #
26 ~ 27	d #	r #	r #
28 ~ 29	s #	r (i) #	r (i) #
E 30 ~ 31	b C	b C	r C
32 ~ 33	ɣ C ~ g C	g C	r C

34	g #	g #	r #
35	s C	s C	r #
F 36~37	b C	b C	b C
38	g #	g #	g #
39	g C	g C	g C

この表のB, E, Fは例外になるので一応除外すると、南屯方言について次のことがいえる。

- (1) 対応するモンゴル文語の子音連続のうちで、最初の子音が b または g ~ γ の場合は、南屯方言において逆行同化が起きている。
- (2) 対応するモンゴル文語の子音連続のうちで、最初の子音が d または s の場合は、南屯方言においてその子音は r になっている。
- (3) 対応するモンゴル文語において子音が語末に来ている場合は、南屯方言ではその子音は r になっている。

同じことを少し観点を変えて例外も含めて整理すると、次の表のようになる。

C ₁ \ C ₂	t	s	q		#
	č	š	k	j	
b	同化, b	—	同化	b	—
d	—	—	r	—	r
g ~ γ	同化, r, g	g	—	r, g	r, g
s	—	—	r, j	—	r (i)

C₁ モンゴル文語における音節末子音

C₂ モンゴル文語における後続する子音

語末

同化 南屯地方で逆行同化が起きているもの

— 該当例がみあたらないもの

以上述べた語以外に、他の方言で子音の前で r が現れるときに、南屯方言でも r が対応する語がある。

	南屯方言	プトハ方言	モムゴル文語	
G 41	ordog	ordoon	(urida)	以前
42	xordog	hordon	qurdun	速い
43	kurdə	kurd	kürdün	車輪
44	dʒə:rd	(jeerd)	jegerde	栗毛
45	mjard	miard		豹
46	dard	(dard)		ゆりかご
47	kwa:rt	kuart		屠殺用のナイフ
48	bakart	(bakart)		火引ききのこ
49	ʃorkw	xorko		かんざし
50	xwarki	huarki		かまど
51	ars	ars	arasun	皮

41～44及び51はもともと r を持っていた語である。他の語も借用された段階で r を持っていたものと思われる。ここで例えば16の dədd-「飛ぶ」では逆行同化が起きているのに、43の kurdə「車輪」では r が残っているのはなぜかという疑問が生じる。dədd- より古い形として南屯方言にも他の方言と同様に dərd- という形があったと考え、この疑問に答えるのは容易ではない。しかし、dədd- より古い形として南屯方言には dərd- という形は存在せず、degde- の g が直接 d に同化したと考えると説明は簡単になる。つまり、同化が起こるのは、子音連続の最初の子音が b, g ～ ʀ (すなわち r 以外の場合) に限られていて、その子音が他の方言のように r にならないうちに同化を起こしたと考えられる。

4. *q, *k の発達⁽¹⁵⁾

*q, *k の発達に関しては次のような対応がある。

	南屯方言	プトハ方言	モンゴル文語	
(1)	x	k	q	
A 1	xattʃ	kabq	qabčan	縄
2	xantʃ	kanq	qanču	袖
3	xautʃiq	kaoqin	qaručin	古い
4	xatʃir	kaqir	qačar	頬
5	xodir	kodir	quduʀ	井戸
6	xotʃ-	koq-	quča-	吠える
B 7	barxaŋ	barkan	burqan	仏

	8	logkə	lonko	longqu	瓶
C	9	axa:	akaa	aqɑ	兄
	10	uxa:	ukaa	uqɑɾɑn	知識
	11	tax	tak	taqɑ	蹄鉄
(2)		x	h [x]	q	
D	12	xabirag	habirag	qabirɑn	肋骨
	13	xɑ:ləg	haalag	qɑɾɑɫɑ	門
	14	xar	har	qara	黒い
	15	xarəŋgui	harəŋgoi	qarəŋgui	暗い
	16	xoni	honi	qonin	羊
	17	xwərəm	huaram	qormai	裾
	18	xobi	hobi	qubi	運
	19	xordog	hordon	qurdun	速い
(3)		g	g ~ w ⁽¹⁶⁾	q	
E	20	ag	ag	aqɑ	兄
	21	arigi	argi	ariki	酒
	22	mjaɡ	miag	miqɑn	肉
	23	dʒaɡ	jag	ʃaqa	襟
	24	sagal	sagal	saqal	顎髭
(4)		k	k	k	
F	25	keŋk	kenk	kemeke	瓜
	26	kəɾəg	kereg	kereg	用事
	27	kemtʃ	kimq	kimusun	爪
	28	kuis	kuis	küisün	臍
	29	kurde	kurd	kürdün	車輪
G	30	orki-	orki-	orki-	捨てる
	31	tulki-	tulki-	tulki-	雄
H	32	ukur	hukur	üker	牛
	33	tʃiki	qiki	čikin	耳
(5)		k	h [x]	k	
I	34	keiŋ	hein	kei	風
	35	ke:r	heer	kegere	平原
	36	kendʒə:	hemjee	kemjiye	量
	37	ker	her	ker	どんな

38	kuggəŋ	hunseen	könggen	軽い
39	kuls	huls	kölsün	汗
40	kudzu:	hujuu	küjügüü	首
(6)	g	g ~ w	k	
J 41	ugin	ugin	ökin	娘
42	nugur	nuwur	nökör	夫, 妻
43	nugu	nuwu	nüken	穴
44	dɟugi-	jugi-	joki-	合う
45	sagi-	sagi-	saki-	守る

この関係をプトハ方言について整理すると次のようになる。

プトハ方言			# _____ V	C _____ V	V _____ V	
*q	>	k	(1)	A	B	C
*q	>	h	(2)	D	—	—
*q	>	g ~ w	(3)	—	—	E
*k	>	k	(4)	F	G	H
*k	>	h	(5)	I	—	—
*k	>	g ~ w	(6)	—	—	J

(1)と(2)及び(4)と(5)に見られる閉鎖音と摩擦音の分化（あるいは閉鎖音の摩擦音化）がどの条件で起こったかは非常に複雑であり、一言では表現できない。はっきり言えるのは摩擦化は語頭でしか起こらなかったという点だけである。一方(3)と(6)の変化（有声化）が起こったのは、ほぼ次のような条件であったと考えられる。

- ① 母音間にあること（すなわち直前に子音がないこと）。したがってBやGの場合は除かれることになる⁽¹⁷⁾。
- ② 後続の母音が短母音であること。すなわち、有声化が起こった段階で後続の母音が長母音ではないこと。したがって akaa 「兄」、ukaa 「知識」のような場合は除かれることになる⁽¹⁸⁾。
- ③ 語頭あるいは問題となっている音節の前の音節に無声子音がないこと。ただし s は別である⁽¹⁹⁾。したがって、tak 「蹄鉄」、qiki 「耳」などは除かれる。
- ④ 問題となっている音節がある種の形態素ではないこと。例えば wairkan 「近い」、uqiiken 「小さい」の -kan ~ -ken の k は有声化しない。一方、形動詞の -wu はすべて有声化して

いる。

南屯方言について整理すると次のようになる。

南屯方言		# _____ V	C _____ V	V _____ V
*q > x	(1)(2)	A, D	B	C
*q > g	(3)	—	—	E
*k > k	(4)(5)	F, I	G	H
*k > g	(6)	—	—	J

南屯方言の特徴はプトハ方言などに起こった(1)と(2)及(4)と(5)の分化が起こっていないという点である。したがって有声化が起こった(3)と(6)を除くと、*q が x に、*k が k にきれいに対応する。すなわち、*q だけが摩擦音化を起こしたことになる。(3)と(6)の変化が起こった条件はプトハ方言などとはほぼ同じである。摩擦音化と有声化とどちらが先行したかは不明である。なお、Martin の記述したオノン氏の発音には、(3)や(6)のような有声化は全く見られないという特徴がある。

南屯方言では x と k の現れ方は、借用語を除くと、共時的には x は a, o に隣接しているときのみ現れ、k は ə, u, i, e に隣接しているときのみ現れるという制約がある。

モンゴル文語に対応する語が見られない語で x もしくは k が含まれている語には次のようなものがある。

南屯方言	プトハ方言	
(1) x	k	
46 xaso:	kasoo	鉄
47 xwalim	kualimp	燕麦
48 dɣax	jak	物
(2) x	h [x]	
49 xwal	hual	家の床より高い部分
(3) k	k	
50 kətəs	ketes	できもの
51 kja:tar	kiaatar	木棚
52 kwa:rt	kuaart	屠殺用のナイフ
53 aŋkje:	aniekie	親戚関係のない人
54 bulku	bulku	鏡
55 bakart	(bakart)	火引ききのこ

56	tikkəs	tibkees	釘
57	ʃorkw	xorko	かんざし

5. エベンキ語との関係

第3節で見たダゲール語南屯方言の同化に類似した現象がエベンキ語（鄂温克語）にもみられる。胡増益、朝克（1986）によると、エベンキ語には bb, pp, mm, dd, tt, nn, ll, dʒdʒ, ʃʃ [tʃtʃh] , jj, gg, xx [khkh] の長子音があり、共時的には、r, gが後続する b, m, t, d, n, dʒ, ʃ [tʃ] に同化し、また rg, tx [kh] がそれぞれ [kk], [khkh] になるという現象があるという。この現象はモンゴル語 tergen からの借用語 təggəŋ 「車」等にも確認できる。オロチョン語（鄂倫春語）、ボジェン語（赫哲語）など他のツングース語と比べてみると、この現象はエベンキ語内部に起こった新しい変化であることがわかる。なお、胡増益、朝克（1986）によると、この現象はエベンキ語のハイラル方言に最も顕著であるという。

ここで問題になるのは、マスキ氏の発音がエベンキ語のハイラル方言の影響を受けたものであるかどうかという点である。エベンキ語のハイラル方言はダゲール語のハイラル方言が話されている地域のみならずプトハ方言が話されている地域ともほぼ重なり合うので、もしエベンキ語がダゲール語に影響を与えたのであれば、なぜその影響がダゲール語の南屯方言にしか現れていないのかが問題になる。

ダゲール語南屯方言の同化は最初の子音が b, g ~ ʀ（すなわち r 以外の場合）に限られているという特徴がある。一方エベンキ語の長子音は共時的にも通時的にも第一子音が r の場合も含まれているという違いがある。

ダゲール語およびエベンキ語、オロチョン語などのツングース語に共通する語彙で同化（長子音）あるいは語末での r 化に関係があるものには次のような語がある。

プトハ方言	南屯方言	『鄂温克語簡志』 (ハイラル方言)	『鄂温克語 蒙漢対照詞彙』	『鄂倫春語簡志』	
1 sarp	sapp	ʃappu	sabp	ʃarbu	箸
2 larq	lattʃ	naʃʃɪ	laqtʃɪ	nabutʃɪ	葉
3 tibkees	tikkəs	tixxəʃun	tigkəsun		釘
4 kurd	kurd		huddu		車輪
5 borqoo		bəʃʃə	bəgtʃə	bərtʃə	豆
6 barkan			budkaŋ		仏
7 tereg	tərag	təggən	təggəŋ	tərgən	車

8	sardie	şaddı	saddiə	şagdı	老いた
9	miard mjard	mıdda	mirda	mıgdu	豹
10	(bakart) bakart		buhadta		火引 きのこ
11	(sujir~g) sudzig		sudzur		信仰
12	bulaar	bulag	bular		泉
13	kodir xodir	xudur	hudur	kudır	井戸

『鄂温克語蒙漢対照詞彙』の子音連続のうち、bp, gtş, gk, dt は完全にではないが逆行同化が起きているものと解釈できる。

1～7はモンゴル系の語彙であるが、そのうち1～3は子音連続に r を持たない語彙であり、4～7は子音連続に r を持つ語彙である。ブトハ方言では子音連続の第一子音がすべて r に変化しているのに対し、南屯方言では第一子音に r 以外の子音があるときにのみ同化を起こしていることがわかる。一方、エベンキ語では、すべての場合に同化を起こしている。

8～10はツングース系の語彙であると思われるが、『鄂倫春語簡志』が示す g がより古い形を保存しているものと思われる。南屯方言で 9, 10が同化していないのはなぜかよくわからない。10については南屯方言で a の前に k が現れることから考えると、比較的新しい時代にブトハ方言から借用されたのかもしれない。

11～13はモンゴル系の語彙で語末に g ~r を持つ語彙である。エベンキ語、オロチョン語はモンゴル語もしくはダグール語を借用したものである。ダグール語ではブトハ方言、南屯方言を問わず、g ~r が保存される場合と r に変わる場合とある。

1～10の例および第3節の G (41～51) の例から考えて、南屯方言の逆行同化はエベンキ語の逆行同化とは別のものであると思われる。

注

- (1)ダグール語の正書法を制定しようという試みが恩和巴圖によってなされている。表記体系の概要は『達漢小詞典』からうかがわれる。
- (2)例えば、『簡志』には aneekee の意味として「客人」という訳語を載せているが、これは「親戚関係のない人」の意である。マスキ氏の発音は aŋkje: だった。
- (3)Ponne (1930), Poppe (1934), 津曲 (1986) のいずれにも、本稿第3節でとりあげる逆行同化と同じ現象は見られない。拿木四来、哈勘額爾敦 (1983: 85-87) にも同化についての記述があるが、本稿のものと同じ現象については全く触れられていない。
- (4)『比較』に採録されているハイラル方言の資料の中にも xasɔ:dʒ 「質問して」、xarab 「十」、xukre:r 「牛で」のような例がある。

- (5)出典は次のとおりである。プトハ方言は恩和巴圖 (1983)、ハイラル方言はПонне (1930)、オノン氏の方言は Martin (1961)、新疆方言は開英 (1983)。
- (6) Poppe (1934: 216-218) にはハイラル方言の詩が載っている。2行目の「十」及び39行目の「赤い」を意味する語の語頭には x が記されている。一方46行目の「赤い」を意味する語の語頭には x は記されていない。したがって、ハイラル方言でも *p に対応する x が現れたり現れなかったりするようである。マスキ氏が歌ってくださった歌の中に「年」を意味する語があり、*p に対応する x が現れた。リズムの関係からか xo:ŋ ではなく xog という形で現れた。
- 『比較』に採録されているハイラル方言の資料の中にも、xasɔ:dʒ 「尋ねて」、xarəb 「十」、xəkɾe:r 「牛で」のように x が付いている例が見られる。
- (7)開英 (1982) の辞書で長母音を持っている語は派生語を除くと38語しかない。
- (8)モンゴル文語 ükü- 「死ぬ」に対応する語は uu- と記されている。これは数少ない k の有声化の例である。tuiun = tuigun 「生の」がモンゴル文語の tügükei に対応するのであれば、これも k の有声化の例である。なお注(19)を参照。
- (9)辞書の見出し語における子音連続は次のとおりである。

『達漢小詞典』

プトハ方言

『達斡爾、哈薩克、漢語対照詞典』

新疆方言

	p	b	t	d	s	q	j	x	k	g		t	d	s	k	g	r	h
m	○	○	—	○		○		—	—		w			○	○		○	
b			○	—	○	○	○	○	○		p	○						
l	○	○	○	○	○	○	○	○	○		l	○	○	○	○			
n	○		○	○	○	○	○	○	○	○	n	○	○	○	○			
r	○		○	○	○	○	○	○	○		r	○	○	○	○	○		
x			○						○		s						○	
y		—									y	—						
k			—	—		○		○										
g				○				—										

○ 語末 C₁C₂#のC₁C₂

— 語中 C₁C₂C₃のC₁C₂

(10)語末で子音が連続するのは、15種類47例、語中で子音が三つ連続するのは8種類9例しかない。

語末 C₁C₂#

rs	17例	ls	2例	ns	6例	wr	3例
rt	5例	ld	1例	nd	2例	ws	1例
rd	1例	ld ₃	1例	ng	1例		
rb,	1例			nk,	1例		
rk,	2例			ng,	2例		

語中 C₁C₂C₃

rsł	1例	ltł	1例	ntg	2例
rsg	1例	ltk	1例	ndk	1例
rsm	1例	ltg	1例		

(11)語末子音の口蓋化の様子は各方言で少しずつ異なっている。

南屯方言	ブトハ方言 『簡志』	ブトハ方言 『比較』	ブトハ方言 『達漢小詞典』	新疆方言	オノン氏 の方言	
səul	səulj	səuɬ	seuli	Seul	seuli	*segül 尾
dʒib	dʒibj	dʒib,	jib		jibi	*jibe 錆
xoni	xonj	xɔn,	honi	Honi	honi	*qonin 羊
gari	garj	gar,	gari	Gari	gari	*rar 手

なお「錆」の再構形は服部（1983：111）による。

(12)表記の煩雑さを避けるために、他の方言の例としては、ブトハ方言の例を『達漢小詞典』の表記で示す。括弧に入れてあるのは、『達漢小詞典』には記載されていない語であるが、この辞書の表記体系に基づいて表記した。マスキ氏のダゲール語の動詞はすべて -we: (-bæi でも -bæ: でもない) が付いた形で採録したが、ここでは語幹だけを示した。『達漢小詞典』では -bei、『達斡爾、哈薩克、漢語対照詞典』では -gu が付いた形で記載されている。

(13)ツングース語の形は次のようになっている。『鄂温克語簡志』 šappu, 『鄂温克語蒙漢対照詞彙』 sabp, 『鄂倫春語簡志』 šarbu, 『赫哲語簡志』 sabki。

(14)モンゴル文語語の形は武・呼格吉勒図（1986：46）による。なお『鄂温克語簡志』 tixxəšun、『鄂温克語蒙漢対照詞彙』 tigkesun。

(15)*q と *k は同じ音素の異音だと考えられるが、説明の便宜上別々に扱う。南屯方言は、この点では Ponne（1930：131-132）に述べられているハイラル方言と殆ど同じである。

(16)Ponne（1930）では口蓋垂摩擦音 ɣ [ɣ]、口蓋垂閉鎖音 ɾ [ɾ]、軟口蓋閉鎖音 ɾ [g] が区別されていて、口蓋垂摩擦音は主に、対応するモンゴル文語で男性語の母音間に現れ、語彙集に

はこの音を含む語が25掲載されている。しかし、母音間で閉鎖音が記されている語も16語あり、音韻的な用語でその使い分けを記述するのは困難である。Тодаева (1960) でも、 ɣ と r が区別されており、やはり、その使い分けを記述するのは困難である。Понне (1930) とは違って ɣ が語頭に現れる語もある。『達漢小詞典』における g と w の書き分けは、これらとは違って、音韻的な用語を用いてある程度その使い分けを区別できる。『達漢爾、哈薩克、漢語対照詞典』、Тодаева (1986) にはこの区別はない。マスキ氏の発音で明らかに摩擦音が聞かれたのは、 oɣw 「脳」の一語である。

		音 価	達漢小詞典	新疆方言
$*k \sim *q$	>	$k (\sim q)$	k	k
		$x (\sim \chi)$	h	h
	>	$g (\sim \gamma)$	$g \sim w$	g
$*g \sim *ɣ$		$G (\sim \text{ʁ})$		
$*b$	>	$b (\sim \beta)$	$b \sim w$	$b \sim w$

上の表で太い枠で囲まれている部分の $g \sim x$ の表き分けは次のようになっている。

$*k \sim *q$	>	g		
aqɑ		ag	Ag	兄
miqɑn		miag	Miag	肉
ɣɑqɑi		gag	Gag	豚
saqɑl		sagɑl	Sagɑl	鬚髭
ariki		argi	Arki	酒
eke		eg	Eg	母
yeke		hig	Ig $\sim$ Xig	大きい
ökin		ugin	Ugin	娘
$*k \sim *q$		w		
noqɑi		nowu	Nogo	犬
soqor		sowor	Sogor	盲

nüke	nuwu	Nugu	穴
nökör	nuwur	Nugur	夫、妻
*g ~ * _γ >	g		
darara	daag	Dag	子馬
öngge	ungu	Ungu	顔色
*g ~ * _γ >	w		
moroi	mowo	Mogo	蛇
nororan	nuwaars	Nugars	青草
jiryuran	jirwoo	Jirgo	六
taru	taawu	Tagu	こがらす

すなわち、*k ~ *q, *g ~ *_γに由来する w は、(1)円唇母音 o, u に隣接し、(2) ungu 「顔色」のように直前に n がなく、(3) ugin 「娘」のように直後に i がないという条件を満たした場合に用いられ、それ以外の条件では g が用いられている。なお、*b に由来する w は非円唇母音に隣接する位置でも用いられている。

(17) kolgi 「耳垢」(qulki) は例外。『比較』に ɔrgi- 「捨てる」(orki-) という語が載っているが、これも例外。

(18) さらに eg 「母」(eke) に対して ekee 「姉」という例もある。

(19) sak 「踝骨」(saqa) は例外。tuiwun 「生の」がモンゴル文語の tügükei に対応するのであれば、これも例外になる。

参考文献

- 安俊 (1986) 『赫哲語簡志』民族出版社
- 布・哈・托達娃娃 (1957) 「研究中国各蒙古語和方言の初歩總結」 『中国語文』總結62期 32-40
- 恩和巴圖編 (1983) 『達漢小詞典』内蒙古人民出版社
- 哈勒楚倫、胡格金台 『達呼爾方言與滿、蒙語之異動比較』學海出版社
- 賀興格、其達拉圖、阿拉塔編 (1983) 『鄂温克語蒙漢對照詞彙』民族出版社
- 胡增益、朝克 (1986) 『鄂温克語簡志』民族出版社
- 胡增益、『鄂倫春語簡志』民族出版社
- 開英編 (1983) 『達斡爾、哈薩克、漢語對照詞典』新疆人民出版社
- 拿木四來、哈勒額爾敦 (1983) 『達斡爾語與蒙古語比較』内蒙古人民出版社
- 孫竹 (1986) 『蒙古語文集』青海人民出版社
- 仲素純 (1980) 「達斡爾的元音和階」 『民族語文』一九八〇年第四期 18-27
- _____ (1982) 『達斡爾語簡志』民族出版社
- 武・呼格吉勒圖 (1986) 「試論中世紀蒙古語元音 e 的音值」 『内蒙古大學學報』哲學社會科版 第3期) 41-47
- 服部四郎 (1959) 「蒙古祖語の母音の長さ」 『言語研究』36号 40-54
- _____ (1983) 「蒙古諸言語の *i の折れ」 『月刊言語』 vol.12, No. 6, 109-111

- _____ (1986) 『服部四郎論文集 第一巻 アルタイ諸言語の研究Ⅰ』三省堂
- _____ (1987) 『服部四郎論文集 第二巻 アルタイ諸言語の研究Ⅱ』三省堂
- 野村正良 (1979) 『原蒙古語の母音体系に就いての研究 一蒙古語比較音韻論研究一』采華書林
- オノンウルグンゲ著 原もと子訳 (1976) 『わが少年時代のモンゴル』學生社
- 佐藤暢治 (1985) 「ダゲール方言の母音変化」『モンゴル研究』(モンゴル研究会) No. 8, 111-118
- 津曲敏郎 (1986) 「ダゲール語ハイラル方言基礎語彙」『モンゴル研究』No.17, 2-38
- Ivanovskiy, A. D. (1894) *Manjurica Specimens of the Solon and the Dagur langages*, Akadémiai kiadó, Budapest 1982.
- Martin, Samuel E. (1961) *Dagur Mongolian Grammar, Texts, and Lexicon*, Uralic and Altaic Series Vol. 4, Bloomington
- Poppe, N. (1934) 'Über die Sprache der Daguren,' *Asia Major* XI, 1-32.
- _____ (1955) *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki.
- Поппе, Н. (1930) Дагурское наречие. Материалы комиссии по исследованию монгольской и танну-тувинской народных республик и бурят монгольской АССР, Ленинград.
- Мөөмөө, С., Ю. Мөнх амгалан (1982) Орчин үеийн монгол хэл, аялгуу, Улаанбаатар
- Тодаева, Б. Х. (1960) Монгольские языки и диалекты Китая
- _____ (1986) Дагурский язык, Издательство "Наука", Москва.

1987年 5 月30日